The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドイツ語圏日本語学習者における内発的動機づけ：短期留学生を対象としたインタビューで語られた学習への「楽しさ」からみる
Author(s)	田村, 知佳
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59131
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	田　村　知　佳（たむら　ちか）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第　２４８５３　号
学位授与年月日	平成23年６月30日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	**ドイツ語圏日本語学習者における内発的動機づけ－短期留学生を対象としたインタビューで語られた学習への「楽しさ」からみる－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　我田　広之 （副査） 教　授　日野　信行　　准教授　難波　康治

論 文 内 容 の 要 旨

今日では、日本政府が実施している「留学生30万人計画」から、多くの国から留学生が日本に来、ドイツ語圏としてドイツ、スイス、オーストリアを合計すると全体の約4%ではあるが、欧米圏に至ってはアメリカに次ぐ多さということになる。また、９０年代からの世界での日本のマンガやアニメといったポップカルチャーの流行から、ドイツ語圏日本語学習者層も増加とともに低年齢化してきた。このことを背景に、本研究ではすでにドイツで行われてきたアンケートを用いた日本語学習への動機づけ研究の結果を踏まえ、本研究では質的調査方法として学習者の語りを分析対象とする研究方法を用い、学習への「楽しさ」から動機づけられるドイツ語圏の日本語学習者像の可能性を描き出すことを目的とした。また、本研究では日本語教育に関する要因だけでなく、過去に学んできた外国語学習経験も調査対象として取り入れることで、過去の他言語学習経験から影響する可能性のある動機づける要因についても目を向けることにした。

まず、本論文の第２章では、第二言語習得における動機づけ研究と心理学における内発的動機づけの変遷について触れ、これまで自律性と関係性を中心に論じられてきた内発的動機づけを含む自己決定に関する議論に対し、内発的動機づけの発端である「有能さ」を新たな視点として新しく加え、「有能さ」、「自律性」、「関係性」を本研究における視点として用いた。その上で、西洋文化圏と東洋文化圏における周辺環境に対する自己観の位置づけの違いから、自発的行為や内発的動機づけに及ぼす可能性のある影響などについても取り入れるため、「社会的背景」を新たな要因として付け加えた。ここでいう「社会的背景」とは、周辺社会がもつ価値観などを含め、学校におけるカリキュラムなど、学習者によって変更することのできないものを指す。さらに、学習行為に対する周辺の評価や学習行為の実感として「フィードバック」も取り入れた上で、学習への「楽しさ」を中心とした内発的動機づけのプロセスを提示した。

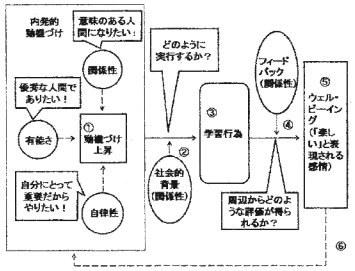

図１　「楽しさ」を中心に見た内発的動機づけのプロセス

まず、①では内発的動機づけの中で、「有能さ」、「自律性」、「関係性」から影響を受け、学習に対する動機づけが上昇する。このことで、内発的な動機づけは上昇し、学習行為へ至ろうと考える。しかし、内発的動機づけが上昇するだけでは学習行為へと至らず、その前に②である「関係性」の一部である「社会的背景」からの影響を考え、「どのように学習行為を実行にするか」を考える。ここでいう「社会的背景」とは「関係性」の中でも例えばカリキュラムや文化的な価値観といったように既存のもので、学習者の工夫などから避けることのできない要因を指す。その上で具体的な学習行為を見出し③の学習行為へと至る。そして、学習行為に至った後には同じく「関係性」に含まれる「フィードバック」を④にて得ることで、学習行為に対する「有能さ」へとつながる。そして、④の「フィードバック」にて良い評価が得られると、⑤の「ウェル・ビーイング」として「楽しい」と表現される感情に至るのである。この感情は後に内発的動機づけを高める要因となり、⑥の経路をたどりさらに動機づけを高める。本研究では、このモデルをもとにドイツ語圏日本語学習者像の可能性と学習への「楽しさ」の位置づけや意味について分析および考察を行った。

本研究では調査方法としてFlick(2002)にて提唱されているエピソード・インタビューを用い、日本関係の専攻をしながら日本への短期留学へと至った５名と、理系分野を専攻している短期留学生２名を対象にインタビューを実施した。ここで調査協力者の母語であるドイツ語で行われたインタビューはすべて文字化した上で、日本語に訳し、コード化及びカテゴリー化という方法を用いて分析を行った。

その上で、分析結果をもとにひとりひとりの調査協力者に対しストーリーを３つもしくは４つに分割して提示した。また、そのストーリーをもとに、本研究のモデルをもとに考察を行った結果、７名の調査協力者においても、例えばヨーロッパの言語や文化とまったく異質でエキゾチックな日本語や日本文化に出会うことで、他の人とは違うことに打ち込む「有能さ」を見出し、自律的に語学学校などに通うことで日本語学習に打ち込むことができ、また「フィードバック」として学習成果や評価といった「有能さ」を実感できる「関係性」を作り出している様子が見られた。

さらに、本研究では各々のストーリーから、調査協力者の共通点として「ポップカルチャー」、「つめこみ学習」、「来日してから」を抽出し、本研究における３つの視点から横断的分析を行った。その結果、いずれの項目においても学習への「楽しさ」として、「有能さ」が重要な役割を果たし、それを得るための「関係性」を自律的に発見している姿を描き出すことができた。

これらの分析をもとに、インタビューで語ってもらった学習への「楽しさ」の説明から、その動機づけにおける重要さと意味について考察を行った。その結果、学習過程そのものに打ち込むことを目的とする内発的動機づけと深い関連のある学習への「楽しさ」とは、ドイツ語圏日本語学習者である調査協力者にとって、学習を開始したりまたそれを継続するために不可欠なものであることが判明した。また、目標に向かってがんばるだけではいつかやる気が失われてしまうため、学習そのものにも楽しさを感じることで効率的に学習につぎ込む原動力を生み出していることが説明されていた。さらに、学習への「楽しさ」として、新しいことや難関への挑戦、学習成果の実感、学習成果をもとに新しいことの発見に関連づけて調査協力者によって説明された。

本研究で行ってきた分析と考察から、ドイツ語圏日本語学習者像の可能性として次のようなものを提示することができる。学習者たちは常に「有能さ」、「自律性」、「関係性」から得られる学習への「楽しさ」を意識し、内発的動機づけを中心として全体的な動機づけを高めている。また、「有能さ」として学習の意義や目的にそぐわない学習内容しか提供されないような苦境においても、学習者が自律的に「有能さ」を見出す「関係性」を見つけ出すことが可能である。そして、ここでいう「楽しさ」とは、常に新しいことや難関への挑戦、学習成果の実感、学習成果による新しいことの発見など、自分自身を成長させることに深く関連している。

また、この結果から内発的に動機づけられた人として、特にすでにある程度の自律性を持った成人学習者の場合、周囲の環境や自分の成長を考慮した上で、次第に学習者自身の目標到達へと導く学習過程に「楽しさ」を感じながら、効率的に学習に注ぐ原動力を生み出しながら打ち込んでいくのである。本研究では、ドイツ語圏日本語学習者を描き出すに当たり、成人学習者における内発的動機づけのあり方といった新しい視点を提示することができた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、エピソード・インタビューという手法を用いて、ドイツ語圏から日本へ短期留学している日本語学習者の動機づけについて調査し、それをとりわけ学習における「楽しさ」という内発的要因の視点から分析を行なったものである。その際には、すでにドイツで実施されたアンケート手法による日本語学習者対象の量的研究結果を踏まえつつ、質的調査方法として学習者の語りを分析の対象としている。また、調査協力者の日本語学習に関する要因だけでなく、過去の他言語学習体験も対象に取り入れ、いわば個人史を縦断する動機づけ研究となっている。

具体的には、ドイツ語圏からの短期留学生のうち、日本史等の日本に直接関係する分野を専攻する５名と理系分野を専攻する２名に対して、調査協力者の母語であるドイツ語によりインタビューが実施され、その結果はすべて文字化された上で、日本語に翻訳されている。さらに、それらのデータにはコード化およびカテゴリー化が施され、それをもとにそれぞれの調査協力者に対して、３つないし４つの分割されたストーリーが提示されることとなる。そして、その当該ストーリーごとに、筆者の考案した内発的動機づけプロセスのモデル（「有能さ」・「自律性」・「関係性」・「社会的背景」・「フィードバック」および「楽しさ」という要因から構成される）による分析が行なわれ、特に学習への「楽しさ」が、新しいことや難関への挑戦、学習成果の実感、学習成果による新しい発見など、自律的学習を導いている様子が考察されている。

以上のような内容の本論文に関しては、とりわけ次の点が評価される。

1. 動機づけ研究は今日きわめて盛んであるが、ドイツ語圏の日本語学習者という研究対象はこれまでほとんど例がなく、新規性がある。

2. 第二言語習得の動機づけに関する先行研究を丹念に跡づけ、内発的動機づけの多層性を明らかにするとともに、それをみずからの分析モデルの構成に有効に反映させている。

3. 動機づけの要因のうち、「楽しさ」の重要性について、インタビュー等を通じて浮き彫りにするとともに、「楽しさ」が相互作用によって構築されることを示した。

4. 筆者のドイツ語における高いコミュニケーション能力を武器として、深みのあるインタビューに成功しており、貴重なデータを得ている。

ただし、審査の過程において、分析モデルにおける「関係性」の概念があまりにも多岐にわたって使用されている、日本語の表現に不明確な箇所が散見されるなど、今後に向けて改善を要する点についての指摘があった。しかし、それらも本論文全体の価値を損なうものでは決してない。

以上のことから、審査委員会は、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。